

びわこの考湖学

49

昨年1年にわたり、琵琶湖史を紹介した「びわこの考湖学」。新年からは琵琶湖ゆかりの歴史スポットを巡る「探訪シリーズ」をスタートします。まずは瀬田の唐橋から。

京阪唐橋前駅から東へ旧東海道を200㍎ほど進むと、瀬田の唐橋があります。唐橋という名称は「平家物語」にみえますが、古くは勢多橋と呼ばれ「日本書紀」の壬甲の乱の最後の戦場として登場します。古代から日本列島の東西を結ぶ交通の要衝として、戦路上重要な位置を占め、

「唐橋を制するものは天下を制する」として、幾度となく勢多橋をめぐる攻防戦が繰り広げられました。また、唐橋を経由する交通は「ものものふの矢橋の舟は早くとも急がば廻れ瀬田の長橋」という歌から「急がば回れ」の語源にもなっています。

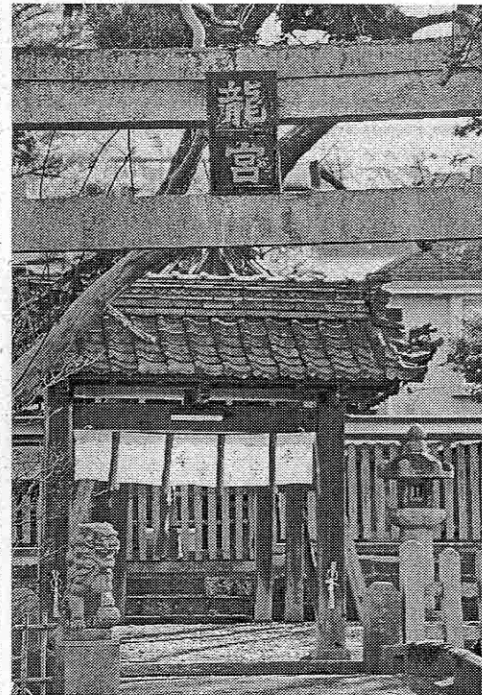
中世以前の橋の位置については、昭和62年から実施され

た瀬田川河床の発掘調査によって、現在の瀬田の位置から約80㍎下流(南)であったことが明らかになりました。この発掘調査では、東岸から約8㍎沖の水面下約3・5㍎の河床において、六角形に組まれた巨大な台材からなる特殊な古代の橋脚台が検出されました。

似た構造をもつ橋脚台は、新羅王京(現在の韓国・慶州)で7世紀後半に構築された月精橋でも見つかった。東アジアで橋脚構築技術が共有されていたことを示しています。

幾たびもの戦乱によって橋がかげられなかった時期もありましたが、天正3(1575)年7月には織田信長が橋を復興し、天正4年ごろには、現在と同じく、中島の東の大橋と西の小橋の双橋からなっていたことが知られています。それ以降の橋の位置は現在とほぼ同じ位置だったようで、構造図や架け替えの記

瀬田唐橋の龍王宮秀郷社



録なども残っています。

現在の橋は昭和54年に架けられたコンクリート製で、欄干には擬宝珠が施されています。擬宝珠の一部には江戸時代と明治時代のものが今も使われています。銘文には架け替えの年と、時の膳所藩主、奉行、棟梁などの名が彫られています。

夕焼けが照らし出す瀬田の唐橋の様子は多くの詩歌に詠われ、近江八景のひとつ「瀬田夕照」として名所図絵や浮世絵にも登場しています。橋の東詰の下流約50㍎には、龍王宮秀郷社(橋守神

社)とその別当寺であった雲住寺があります。神社には橋の守護神(竜神)と、三上山のムカデ退治伝説で有名な倭藤太秀郷(藤原秀郷)が合祀され、寺には「江州勢田橋畔二社縁起」など倭藤太伝説の遺品が伝えられています。ムカデ退治伝説は、勢多橋に横たわる大蛇を臆せずまたいで歩く秀郷に、大蛇の姿に化けた竜神が、三上山を7巻き半する大ムカデを退治してくるよう願う物語。秀郷は関東で勃発した平将門の乱を鎮めたとされる実在の人物で、ムカデは将門の勢力を例

瀬田の唐橋のそばに鎮座する龍王宮秀郷社 ー 大津市瀬田
えたともいわれれます。
勢多橋の下の水底には竜宮があったという伝承もあります。瀬田川より向こう側とこちら側とはちがう世界で、勢多橋が2つの世界をつなぐものとしてとらえられていたことを示しているのかもしれない。

唐橋の東詰を下流にさるに150㍎ほど歩くと、「勢多古城址碑」「瀬田城址」の石碑があります。伝瀬田城跡で、永享元(1462)年ごろ、甲賀の土豪山岡氏が築城したと伝わっています。

古代以来、多くの人々が往來した勢多橋は、いまなお琵琶湖大橋・近江大橋とともに琵琶湖の東西を結ぶ重要な交通路として機能しています。また、瀬田の唐橋として親しまれ、琵琶湖と背後の山並みからなる景観とともに名所としての姿をとどめています。

(滋賀県文化財保護協会 大道和人)

ムカデ退治伝説の舞台